

布引の滝 葺合町

●「布引町（ぬのびきちょう）」の由来



布引の滝・雄滝

由来は別個のものだととらえているようである。

滝の水源は生田川の上流、摩耶山の奥で六甲山系の獺（かわうそ）池から出ており、滝の下流は生田川となって海に流れている。雄滝は高さ 43 ㍍、雌滝は高さ 19 ㍍ある。こうした滝には、昔から、そこに竜宮城の乙姫さまが住んでいたという言い伝えがある。雄滝の上に五つの水のえぐった横孔があき、水はこの孔に入っては出て、白い水玉を飛ばしながら雄滝を落下して行く。この孔は上から滝姫宮、白竜宮、白鬚宮、白滝宮、五滝宮と言われ、乙姫はこの竜宮城に住み、竜神となり海へ出かけ多くの船や船人を守ったという。布引の滝が白く見えるのは、この乙姫が着ている白い布がさらされているからだという言い伝えがある。

日光華厳の滝、紀州那智の滝とともに三大神滝と呼ばれ、古くから神秘的な伝説がつくられたりした。また、平安時代の昔から数多くの貴族や歌人がこの地を訪れ、古典文学作品などにもしばしば登場する。『伊勢物語』には、在原業平と兄の行平と目される公卿が滝見物をした様子が描かれ、『平治物語』には平清盛の滝見物の際に清盛に連れられて滝に来た家来の難波経房が悪源太源義平の雷に殺されるという話が載っており、さらに、『源平盛衰記』には清盛の長子重盛が滝見に来たとき、家来の難波経俊が滝壺に入り竜宮城を見て外に出たところを雷に打たれたという話が書かれてある。

・「雲居にさらす布引は、我朝第二の滝とかや。業平の中将のかの滝に、星か川辺の螢かと、浦路遥かに詠めけん、いづくなるらんおぼつかな。」（『源平盛衰記』）

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著

布引の滝 葺合町

- ・「（後醍醐天皇は）布引の滝など御覧じやらるる…」（『増鏡』）

布引の滝は古来から名勝の地として知られ、現在でも神戸の名所のなかでは全国的に知られたものの一つである。滝は新神戸駅の北約 100m の所に雌滝が、その 200m上に雄滝が、その間に下から鼓ヶ滝、夫婦滝 があり、この四つを総称して「布引の滝」と呼んでいる。

「布引」の名前は、滝を落ちる水がまるで布を垂れているように見えたため付けられたものと言われている。生田川が現在の流れに付け替えられた時、旧生田川が埋め立てられ道と町になったが、道を「滝道」、町を「布引町」というようになった。ただ、大和政権時代にこのあたりを支配した豪族に「布敷首（ぬのしきのおびと）」の名が見られ、律令時代にはこのあたりを「布敷郷」と呼び、この布敷がなまって布引になったとする説があり、この考えからは地名の「布引」と滝の名前の「布引の滝」の由来は別個のものだととらえているようである。

滝の水源は生田川の上流、摩耶山の奥で六甲山系の瀬（かわうそ）池から出ており、滝の下流は生田川となって海に流れている。雄滝は高さ 43m、雌滝は高さ 19mある。こうした滝には、昔から、そこに竜宮城の乙姫さまが住んでいたという言い伝えがある。雄滝の上に五つの水のえぐった横孔があき、水はこの孔に入っては出て、白い水玉を飛ばしながら雄滝を落下して行く。この孔は上から滝姫宮、白竜宮、白鬚宮、白滝宮、五滝宮と言われ、乙姫はこの竜宮城に住み、竜神となり海へ出かけ多くの船や船人を守ったという。布引の滝が白く見えるのは、この乙姫が着ている白い布がさらされているからだという言い伝えがある。

日光華厳の滝、紀州那智の滝とともに三大神滝と呼ばれ、古くから神秘的な伝説がつくられたりした。また、平安時代の昔から数多くの貴族や歌人がこの地を訪れ、古典文学作品などにもしばしば登場する。『伊勢物語』には、在原業平と兄の行平と目される公卿が滝見物をした様子が描かれ、『平治物語』には平清盛の滝見物の際に清盛に連れられて滝に来た家来の難波経房が悪源太源義平の雷に殺されるという話が載っており、さらに、『源平盛衰記』には清盛の長子重盛が滝見に来たとき、家来の難波経俊が滝壺に入り竜宮城を見て外に出たところを雷に打たれたという話が書かれてある。

- ・「雲居にさらす布引は、我朝第二の滝とかや。業平の中将のかの滝に、星か川辺の螢かと、浦路遙かに詠めけん、いづくなるらんおぼつかな。」（『源平盛衰記』）

- ・「（後醍醐天皇は）布引の滝など御覧じやらるる…」（『増鏡』）

布引の滝 葺合町



夫婦滝



鼓ヶ滝



雌滝